

國道八號線 (二)

金 森 誠 之

四

大正館は上野原唯一の映畫館で、中は疊敷きとなつて、座りながら活動寫眞を見られる様になつてゐる、町が狭い丈けに觀客は何れも顔見知りで、いとも和かな空氣が流れてゐる。

「大變な入りですねぇ」

「恐らくこの小屋初まつてからこんな事はありませんねぇ」

「何しろいつもは雨が降つてる様なスリキレたフィルムしか來ないのが、主役が當地出身と云ふので封切早々よこしたんだそうですからねえ」

「何しろあの娘も大したものになりましたよ……元々小供の頃から奇麗で利巧でしたからね」

開演のベルがなる、あたりが眞つ暗となる、人々は水を打つた様に靜まつて片づをのんで、映寫幕を見つめてゐるメ！
タイトルは大きく寫し出された。

國道八號線 T B K 社特作

ピアノとヴァイオリン丈けの伴奏が初められた。

この時、奈良技師と母親とが、政男と云ふ少年に案内されて這入つて來た、ぎつしりとつまつた人々の間で、やつと三人の座る場所を見つける迄は大變であつた。

配役などの字幕は進んで行く、最後に、

……この映畫は主役 細田和子嬢の物語りを綴る……

と大きく寫し出された。

五

美しい流に架せられた、夢の國に見る様な釣橋、朝霧につつまれた中から、洋裝の可愛らしい娘さんが下の方を手招きしながら呼んでゐる。

荒尾さん御飯ですよ！

荒尾と呼ばれた青年が、釣の手を止めて上を見ると、許婚の良子が、釣橋に凭れて自分を呼んでゐる。

茲は上野原の龜岩と云つて、桂川の狹まつた谷合に、形面白く、龜の様な形をした岩である。鮎が一番よく釣れるので其の時期には、岩一面の人ばかりであるが、今日はどうしたものか、荒尾が唯一人釣をたれてゐた。

直ぐ行きますよ

返事をして、岩を昇らうとすると、どうしても昇れないあせればあせる程上れない。

お眼覺めになつて？ 御飯ですよ

はつと其の時荒尾が氣がついた。夢であつたのであつた眼を覺ますと、襖越に女中が

昨晚のお客様が御一所に御飯を頂くつてお待ちかねでございます

と云ふ。

荒尾は大きなびをして、立ち上つた。

朗かな朝である。窓越しに見る桂川は、すっかり朝霧に包まれて、かすかに、白い波頭が朝日にきらめいてゐる。

大急ぎで仕度してまいりますから、そう云つて下さい

タオルを肩に引つかけ齒をみがきながら、足音軽く、洗面所の方へ急いで行く。

六

朝食がすんだ後であらう、お膳の上は雑然と取亂されてゐる、正面には五十がらみの如何にも重役と云つた風采の紳士はリンゴを食べながら、側に座つてゐる荒尾に何やら熱心に話をしてゐる。下手に其秘書らしい男はかしまつて控へてゐる。

結局、國道は下の島田村を通る事になりますね

荒尾は如何にも困つた顔をして、其の返事をためらつてゐる。

「いゝじやありませんかどうせ親子になる間柄だから。」

重役風の男は坂井と云つて、とあるガソリン會社の社長であつて、其の娘の良子は近く荒尾と結婚式をあげる事になつてゐる。

でも役所の事ですから、この返事は御免下さい

坂井は不機嫌そうに眉をひそめたが氣を取り直して

「では御尋ねしますませう。」

「別に御相談したいんですが、今度上野原の土地を賣つて島田村へガソリンスタンドの用地を買ひ度いと思つてゐるんで

すが、馬鹿を見る様な事はありませんまいね」

この返事で何分の見當をつける事が出来るだらうと、さも得意さうに荒尾の顔を見つめてゐる。「今少しお待ちになつては如何でしょう」

君は堅過ぎる程堅いのう

坂井は、秘書の方を見て、ハッと氣がついた様に

一寸散歩して来るから、例の用事を片付けて置いてくれ給へ

荒尾を促して散歩に出掛ける。

七

荒尾の部屋へ、秘書がしのび込んで圖面をかき廻してゐる、やつと一つの圖面を捜し出す。

圖面には其の右側に最後の決定案と記してゐる。そつして墨黒々と、島田村を通過して、上野原が除外された線が、太く記入されてゐる。

秘書は早速、明るい壁に其れを張りつけて、寫真機を取り出して撮影してしまふ。

八

國道八號線を、東京より甲府へと、上野原を過ぎて、鶴川を渡り、巖村に這入ると、此の邊にはめづらしい立派な洋館が建つてゐる。名付けて依水莊と云ふ。

其の名にふさはしく、桂川の溪流に依り、川の非常に狭まつた所なので、兩岸は物すごいばかりに、阻立つて、其の下は深く淵となつて、宿の窓から見下すときは物すごい位で、他には見られない景色を持つてゐる。

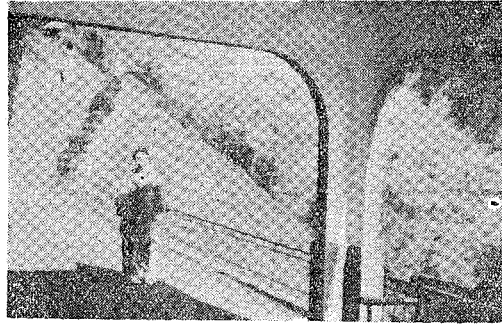
依水莊は今櫻が真盛りである。その花のトンネルをくゞつて、一人の美しい娘が、ホテルへ急いでゐる。つゝましく被布を纏つて其の下には銘仙とは云へ、大柄のはつきりした縞目が若々しく見せてゐる着こなしこそ陋びてはゐるが、田舎娘とは見られない美貌でそれが櫻に映えた面指しは、一段と引き立てゝ上野の櫻の人混みに歩ませても、誰も彼れもがふり返るであらうと思はれる。

あのう坂井さんからお呼び出して参りました細田ですが……

玄關先に立つて案内を乞ふ。

依水莊で一番眺めのよい、洋室では、今坂井は圖面を見ながら、秘書とガソリンスタンドの用地の買収や上野原の持ち家の處分などに就て色々と相談してゐる。

「とに角、家賃のたまつてゐる家は片しから壊してしまふんだね」



「今日、細田と云ふのを呼び出して置きましたが、何んでも娘と十才ばかりのその弟で、ガソリンを賣つてゐますが、その父親は永の病で、家賃の拂へないのも無理もないと思へますが……。」

「いや、人情と云ふのはそう安賣りはしないものだ、氣の毒だが、止むを得んさ」

贅澤な葉巻から立ち上る紫の煙は、流れて、秘書の面をかすめる。この葉巻一本で、憐れな親子三人は暫くの生計を立て得るであらうに。

軽いドアのノックが聞えて細目にあけた、ドアから女中は顔が表れる。

「あのう細田さんの娘さんがまゐりましたのですが」

「来たか、こちらへ通せ……」

坂井は秘書の方に眼を移し

「お前からよく厳しく話して置け、わしは一寸他に用事があるから」

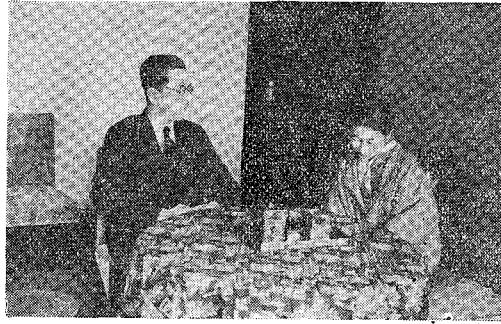
と云ひ残して、部屋を出て行く、

部屋を出ると、出會がしらに、しとやかに階段を上つて来る娘に出會した。多くの美妓を知つてゐる彼であつた。娘の良子の友達である美しいモダンな娘も澤山見て居つた。けれ共此の様な總ての男性を引きつけてしまふ様な而かもノールで犯し難い美しい娘を見たことがなかつた。

細田さんですか？

彼は思はず聲をかけた。

え、細田美智子でございます



淑かに下げた項は如何にも魅力的に白かつた。

彼は秘書にまかして出て来たのは如何にも残念さうに思はず部屋に引き返し、秘書に何にやら耳打ちして、さりげなげに出て行つた。

美智子は秘書の前にうなだれて、唯「すみません」をくり返へすより外なかつた。

九

障子には黒い二つの影が寫つてゐる。男とそうして女の、けれ共、それは廊下を距て、其處は桂川の斷崖、而かも其の對岸は、壁の様につゝ立つた雜木林、此の世の誰もがこの影を見る事が出来ない、障子越しに聞えて來る聲、

「何も恐がる事はない、あんたが俺の家に來てくれればお父さんも病院へ入れよう、弟さんも學校へ出してあげようと云ふものじゃ、あんたの決心一つで、お父さんに立派に孝行も出來ようと云ふのじゃ。もしいやと云ふなら、家賃を奇麗に拂つて貰ふかでなければあの家を立ちのいて貰ふ、若し立ちのかなければ壞して持つて行つてしまふばかりだ」よ

暫く其處に答へなき静けさがつゞく、桂川の瀬の音ばかりが、淋しくせうらいである。

うなだれてゐた娘の頭が上つた。

「お断り致します、……妾はそんな孝行はないと信じて居ります。」

娘の影は一つの所に止つて微動だもしない。

「ハ、ハ、ハ、俺が悪かつた、まあさう堅くならないで、男が立ち上つて娘の方に近寄り驚いて立ち上り逃げ去らうとする娘を抱き寄せようとする。

障子に近づいたか、男と娘との顔がくつきり寫り出されたとき、可弱い娘の手はピシリと男の髭面を打つた。

荒々しくあけられた障子から、細田美智子は息せききつてかけ出して行く、それを怨めしげに、坂井が見送つてゐる。

××××××××××××××××××。

館内の観客は、一度に拍子した、中には

「ザマ見ろい、助平野郎!!」

と眼のあたり人が居たかの様に興奮してゐる青年もあつた。

荒尾は安心した様にホツト息をつく、

十



荒尾は手紙を読み終つて深く溜息をつく、

彼は愛の絆は一番力強いものと考へて居た假令遠く離れて居ても、それに結ばれた二人は他からどんな方が働いても切れるものでないと信じて居た。

昭和六年府中國道の混凝土鋪裝を施行してゐる時からである。あの時まだ養生中の混凝土の中へ乗り上げた自動車があつた。其れに乗り合せた坂井と其の娘良子とに荒尾がその自動車を助けた事から知り合ひになつた。

その頃の良子には技術と云ふものに大きな憧れを持つて居た。混凝土で道を拵へて行く、そうして、今迄の孔つこだらけの道が鏡の様になつて、幾臺も幾臺もの自動車は、感謝しつゝ走つて行く。

それを作つた自分が眺めて居るときどんなに素晴らしいだらう。そうして彼の女は技術を通じて荒尾に氣持ちが引かれて行つた。

「荒尾さん土木つてどんな仕事？」

とある日良子は荒尾に土木の意味を聞いた。

「一口で云へば地球藝術ですね」

「まあ素晴らしい！」

「彫刻家は石膏だの、木だので自分の藝術を表現する。畫家は紙の上に、筆で自分の藝術を表現する。吾々土木技術家は地球の上へあらゆる文明の利器を用ひて、自分を刻みつけて行くんです。」

「藝術そのものゝ定義は六ヶ敷いものですが、僕は、自分の精神をあるもので表現した場合、そのものを藝術品と見たいと信じて居ます。」

單に撮つた風景の寫眞は、機械を通じてあるものが現されたに過ぎないから、其れは藝術品とは云へない。けれ共同じものであつても、畫家が筆によつて自分の精神を其の繪に現された時藝術になるのでしょうか。」

彼は河川工事、港灣工事、道路工事、それからそれへと、土木技術家は地球の上へ、自分の精神を刻み込んで行くことを話をした。良子は聞いて居ながら、感激に長い睫に涙さへ宿して居つたこともあつた。

けれ共この感激は永續きはしなかつた。良子は氣の變り易い性質で、熱する事が強いと共に冷むるのも早かつた。常に明るさを耳追ひ度がつてゐる彼の女には、土木技師は不向きであつたかも知れない。

彼の女は映畫だ。ダンスパーラーだとか遊び廻つて居る内に、何時とはなしに荒尾を忘れて行つた。怪しげな外人と二人で、夜の京濱國道を走らせてゐる彼の女をさえ見かけた人さえあつた。

荒尾は再び手紙を擴げる。

「妾には上野原などと云ふ田舎はとても堪えきれないんですもの、あなたと云ふ人は勿論妾には忘れられない人ですけれど仕方はないわ。……」

荒尾は手紙を引きさいてしまつた。

十一

八號國道の交通量は一日自動車百二十臺を平均してゐるが、上野原でガソリンを賣つて行く自動車は東京より僅かに二時間行程にある丈けにさ程多くはない、加之上野原にあるスタンドは美智子の家を加へて三軒にもなるのだから、其れで

親子三人而かも病人を抱へての事であるから、美智子の手内職などの収入を加へても、並大抵の事ではない。而かもそのガソリンスタンドも家も失はれようとしてゐる。

國道が上野原を通過する事になるならば、他のガソリン屋もスタンドを拵へるであらう、それが今では殆んど上野原を通らないと云はれて居るのであるから、假令坂井にスタンドを取り上げられなくとも、失業の運命にある心細い状態である。

美智子は淋しい夜道を、トボくと歩いてゐる。其の日の用事をすっかり片付けて、父や弟の寢靜まつたのを見とゞけて、鎮守の宮へ、日參をするのであつた。

「お父様の御病氣が一日も早く治る様に！ 國道が上野原を通過する様に！」



「神様、二つの事を併せてお願いするのは甚だ勝手がましいのですけれど、これは妾には一つのお願ひでございます。」

眞心こめて、美智子は祈つてゐる。

上野原はすっかり眠つてゐる。遠くでキー／＼と云ふのは夜泣き櫻が泣いてゐるのであらう。年経た櫻の老木は風に吹かれると其の枝がこすれてキー／＼と音を發する。こうした夜には更に一層の淋しさを加へてゐる。